

キリスト道講演会

人間にとって大切なもの

——神の賜う信・望・愛——

2007年11月11日 (東京 法曹会館)

奥田昌道

マリアとマルタ 創世記 箴言 コヘレトの言葉 イザヤ書 エレミヤ書 ホセア書 アモス書、ミカ書 カール・ヒルティ マタイによる福音書 隠れたことを見ておられるあなたの父 何も心配せんではない マルコによる福音書、ルカによる福音書 ヨハネによる福音書
ローマ信徒への手紙 コリント信徒への手紙 ガラテヤ信徒への手紙 祈り

マリアとマルタ

皆さん、よく来てくださいました。今日はとても盛りだくさんのことをお話してしまうのではないかと思います。けれど、「思い煩うな」という聖句もありますから、楽しくやりましょう。今日お話をさせていただく予定の全体箇所をプリントにして用意させていただきました。私が予定しています話の味は、初め旧約聖書の部分をとりあげ、そしてヒルティの言葉をご紹介します。

して、それで前半は終わり、休憩に入ります。そのあと後半に、新約聖書の部分と最後のまとめを話したいと思っております。皆さまは会場の受付で『エン・クリスト』(60号「奥田昌道先生講演特集号」、2007/10発行)と、緑の冊子(「聖霊・助け主・真理の御霊」2007年聖霊降臨節集会、2007/9発行)を受けとっていただいたと思います。この緑の冊子は、京都キリスト召団の集会所でお話したものを文字化していただいたもの。それからこの白い冊子は、昨年、一昨年とこの会場でお話したものを文字化していただきましたものです(「わがうちに在すキリスト」2005/10/16、「聖書に親しむ」2006/10/22)。

そこで、今日の主題ですが、

「人間にとって大切なもの——神の賜う信・望・愛——」

これで答えは出てしまっているんです(笑)。あとは注釈をするだけになってしまいますので、どこで終わってもよろしいわけですね。

「マルタとマリア」のお話は有名なところですよ(ルカ10:38〜42)。

「³⁸一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。³⁹彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。⁴⁰マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何とも思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」⁴¹主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多

くのことには思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」(ルカ10・38、42)

この話を学生に話しますと、「エマオ会」という聖書の学びの会やいろんな機会に話しますと、「マルタはかわいいそう!」と言うんですよ。皆さんはどう思いますか。マルタは一生懸命に働いて、マリアはイエスさまのそばにじっとしている。何もしない怠け者でべったりくっついていて、マルタは忙しく忙しく動きまわって働いて、何とかイエスさまをもてなそうとして一生懸命やっている。ついつい、「マリア、手伝ってよね!」と言ったら、イエスは

「だめ、だめ、だめ。マルタよ、マルタよ、あなたは心みだれて思い煩っているのでは無いの。大事なものはそんな多くはないんだよ。マリアはいいほうを選んだのだよ」

と言う。「何という方だ、この方は」とだいたいの方は思うんですね。皆さんの判断はいかがでしょうか。会場には裁判官の方もいらつしやるし、やがて裁判員制度も始まることを考慮すれば、皆さんはどういう評決をなさるかということですね。

この話は本当によくできています。まず、マルタが先にお迎えに来る。非常にマルタは活動的なんです、よく気がつく。マリアという妹がいたが、

「主の足下に坐って御言に聞き入っていた」

という。何もしない。ところが、マルタは接待のことで忙しく、心を取り乱した。このあたりに問題がある。接待のことに忙しくて心を取り乱し、そしてつい、むかむかして、「あの怠け者のマリア

はちつとも手伝わない」と。マリアがべったり、イエスの足下で話に聞き入っている。悦にいつて滔々^{とち}と話をしているイエス——「ばかやろう」とまでは言いませんけれども(笑)——「何というお方だ、私の気持ちも知らないで」と、こういうドラマなんです。それに対して、主は言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って、思い煩っている。しかし、なくてはならぬものは多くはない。いや、一つだけである」

ここまででは、まだよろしいんですね。

「マリアはその良いほうを選んだ」

と。「何をぬかすか、この野郎」と、普通の方なら思うでしょう(笑)。そこで、皆さんに申し上げたい。やはり、この忙しい働きは、マルタ自身の意志の現れ、自分の意欲、自己満足なんです。何もイエスは頼んでおられない。イエスは、

「これであなた方ともお別れかも知れない」

と思つて、立ち寄られたと思うんですね。その時に、

「イエスというお客さんが一番望んでいることは何でしょうか、どのようにしたら、あなたはお喜びくださるでしょうか?」

と、言葉に出さなくとも、忖度^{そんたく}するとか、わからなければ、「こうでしょうか、ああでしょうか?」と聞く。それぬきで、自分の判断で、自分が満足するように、忙しく取り乱して、とうとう心まで騒がしくなつて、そして、頭にきた。このことをイエスは決して喜んではおられない。イエスのお

心からしたら、

「もうこれでお別れかも知れない。だから、私の話をしっかり聞いてよ。お茶もお菓子もいいからね」

というのが本心だったかも知れない。そのあたりを汲み取ってほしい。そのことが「人間にとって大切なもの」という話につながるようになります。つまり、自分の判断で、自分の考えで、自己中心で善と思うものを一生懸命にやる。それはひよつとしたら、御意みごころになつていないかもしれない。やっぱりキリストが、神さまが——クリスチャンでない方だったら、「天が」で結構ですよ——

「いと高きお方が何を喜んでくださるか、何がそのお心であるか。自分はそのお方に仕える僕しもべである」

という気持ちで働けば、実を結ぶ。みんなが「めでたし、めでたし」になるけれども、この世の中は、ともするとマルタさんがもてはやされる世の中ではありませんか。

今の世の中は忙しいですよ、日本の社会というものは。私なんか新幹線で日帰りまで往復することも時々ありますし、忙しいですよ。非常に忙しく働いている。そこで、ストレスで神経をだめにされたり、行き詰まってしまうことが多くある。もう少し立ち止まって、せめて日曜日はマリアになつていただきたい。日曜日はマリアになつて、

「いったい自分は馬車馬のように働いているけれども、これでいいのかしら。本当の意味で人間にとって大事なものは何なんだろうか？」

と、心のゆとりと言いましようか、そういう反省の時を各人が持つていただければ素晴らしいのではない。そういう思いがしてなりません。

今日は皆さまが本当にそのとおりのことを実践し、ここに来てくださった。イエスはこの会場に——姿は見えないけれども——いらつしやると思います。もし、私がイエスという、キリストという霊的人格者が単なるイリュージョン、幻影、幻想、思われたるもの、観念的なものであると思うなら、こんな講演会はいたしません。絶対にいたしません。キリストという方は本当に今も生きて働いて、我々を導いておられる霊的なリーダー、お師匠さんである。本当の導き手として、私がこの何十年間、寄り添ってきたんです。23歳の秋から今日に至るまで。その方によって私の今日がある。だから、その方の実在性が、「もしも単なる思い込みであるならば、私ほどみじめな人間はいない」と、パウロと一緒に言いたいと思う。でも、キリストの実在はリアリティー（実在、現実、事実）なんですよ。

ヒルティもそのことを言ってます。ヒルティは、

「神と共にあること。神さまが自分と一緒にいてくださること。そして、その神さまの中にあって、それに包まれて一緒になつて仕事をする事、これが人生の最高の幸せだ。人は選択肢として、神と共に生きるか、神なしで生きるか、この二つである。しかし、神なしで生きるという人生は実に悲惨である。若い時はまだいいけれども、年を取れば取るほどだんだん悲惨になつてくる。年を取つて、体が言うことをきかなくなつて、頭も固く

なつて、人に当たり散らしたりするばかりで、本当のものを楽しもうと思つても、やはり遅いのではないか。なぜなら、老化してしまつて、柔軟性がなくなつているから、新しいものをなかなか受けとれない。これが老年という姿だ。しかしながら、神に導かれて歩んだ生涯というものは晩年ほど輝いていく、そして、本当のものが見えてくる」

そういうことをヒルティは言っている。ヒルティは百年前の方ですけれども、その方の作品で、あとで紹介をしますのは、晩年76歳の最後の作品です。そのヒルティと私は非常に共感するところがありまして、今年、クリスマス(降誕節)とかイースター(復活節)とか、特別な祭りのない月は、ヒルティをずっと東京キリスト召団新宿集会の皆さんと学んできました。しかも、それをオープンな講演会形式でやってきましたので、この会場に来られている方の中にはその講演会にも顔を出してくださった方もいらっしゃるかもわかりません。

どっちにしても、我々の人生は永遠なんです。途中下車したらもつたいたい。永遠にずっと御国の輝く旅に導かれていく。そういう皆さんとは、旅の道伴げなんです。どこで出会つても一期一会。しかし、今日お会いした方ともう二度とお会いできなくても、向こうの世界では必ずお会いできるという、その確信が私にはあります。ヒルティさんという方は、

「もし来世があるとしたら、自分は向こうで無条件に会いたいのには妻だけだ」

と言う。私ならもつとたくさんの方々がいます。いっぱい人を好きになりますから。たくさんの人に会いたいけれども、ヒルティはそこまで奥さんに惚れ込んでしまった(笑)。まあ奥さんがヒルテ

ィより少し早く亡くなられたので、余計そういう思慕の面が強かつたんでしょうけれども。

この世はどんなに頑張つて生きても120年がせいぜいでしょ、今のところは。しかも、仮に生きたとしてもマラソンのような120歳は見たことがない。だいたい、寝たきりになったり、夢も希望もないような生活を送っていたり、そういうものではつまらない。人間は非常に尊くつくられています。そういうことを皆さんと一緒に時間の許される限り、楽しんで味わつていこうと思います。

私はこの講演会のために、「さあ、どんなふうにお話すればいいんだろうか」と思ひまして、まずは資料として旧約聖書と新約聖書のうち、一つの書から1、2か所ずつ選んできました。新共同訳の聖書は現代語で書かれ、非常にわかりやすいので、この聖書を基準にしながら引用しました。しかし、私が馴れ親しんだのは1955年発行の口語訳聖書なので、所々そこから取っています。それから、文語訳聖書もありますが、特に若い方には文語は近づきにくいだろうということで、私は若い世代の方々のことも思つて、新共同訳から取ってきました。なかなかよくできていると思います。しかしながら、原文はみな一つなんです。原文は一つだけれども、それが時代に合うように、それぞれ工夫して訳をつけています。だから、皆さんそれぞれ、自分に気にいる訳をつけてみたらいい。

「マルタよ、マルタよ」

と書いてあつたら、「牧子よ、牧子よ」と読み替えた方がいい(笑)。自分に語られているものとして読まなくては。そこは客観的に聖書を読む視点と違うんですよ。これは自分の人生のために自分で翻訳をつくつて、自分で読んでおれば、それでよろしいんです。私流でいい。

創世記

さて、何を選んできたか。まずは創世記です。二か所、「人間の創造」というところを選びました。これは二つの資料から取ってありますので、それで違うんです。同じ資料から取ったなら、矛盾するんですけれども、別の資料を基本にしているものですから。たとえば、「神」という言い方と、「主なる神」という言い方が使われているように、違うんです。その詳しいことは別にしまして、はじめのほうは、

「²⁷神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」(創世記1・27)

これは素晴らしいことを言ってますね。「神にかたどって」という。神には形はありません。すると、その「かたどって」というのは内面の姿です。ひとこと言えば、「愛」ということでしょうか。「信ずる」ということでしょうか。そういった内面の姿、それが、

「神に即して神は人をお創りになった」

ということ。それから、「男と女にお創りになった」と。人間は男と女の二種類しかないので、中性というのはどうもありません。それから、次のところにいきますと、

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創世記2・27)

これもなかなか素晴らしいことを言っている。

「土の塵で人をつくった」

という。「なんだ、人間というのはつまらないものだ。土から出て土に還るなんて」と。我々は亡くなったら、焼かれて骨になって、土に埋められていく。やがて土に還る。土から生まれて土に還る。悔しいけれども、仕方がない。「アダム」というのは、「アダマ」「土」からつくられたから、「アダム」という表現なんです。でも、それだけでは、人は生きていない。そこで、

「その鼻に命の息を吹き入れられた」

これが大事なんです。神の霊気を吹き込まれて、それで初めて

「人はこうして生きる者となった」

と。生物学的人間は土から出て土に還ります。この生物学的な人間を科学技術と申しましょうか、何か滅茶苦茶なことを今してくれている。どこまでいってしまうんだろうかと。精子を冷凍して保存すれば、何百年でももつそうですから。それを解凍して、からだの中で受胎させますと、お爺さんの何百年後にぱつと子供が生まれるという、そんなことになったら困りますよね。だから、そうしたことは今は禁じられていますけれども。

生物体としての人間を科学はどこまでも究明していつて、遺伝子の全解析ができて、その人の自然人としての生涯を遺伝子で解いていけば、ほぼ決定できるような、そういう恐ろしいところまで科学は進んできていますよね。しかしながら、それだけが人間だったら、まさに、手で操作できる物体としての人間でしかありません。人間の尊厳というのはいったいどこにあるのだろうか。

人間の尊厳とは何なのだろうか。それはここにあります、

「神さまから命の息を吹き込まれて、そして人間は生きるものとなった」

という、この霊的存在しての人間。神さまが霊的存在であるように、人間も霊的存在です。「万物の霊長」と言いました。霊的存在です。去年もここでお話したかもしれませんが、『大言海』という大きな辞書があります。その「ひと」というところを見ると、

「霊が止まる」

と書いてあります。霊が止まる。そして解説に、

「神霊のとどまる存在、それが霊止である」

と書いてある。神霊が止まっている存在。ところが、現代では神霊がみな出ていった。出て行って、皆さんのうちに神霊が止まっていけないみたいではありませんか。もう一度、本当の神さまの霊、愛なる神の霊が止まってこそ、神さまの形にかたどられた人間の姿が回復できるわけですよ。神さまは永遠の存在者、実在者です。神さまの御意というのは、

「あなた方を永遠な存在者にしたい、永遠の生命を差し上げたい」

という願いです。あとから新約聖書のヨハネの福音書を取り上げますが、

「御意はあなた方が滅びないで、永遠の生命を得る。そして終わりの日に甦える」

これは復活のことですけれども、これが御意です。

「そのために私は遣わされてやってきた。自分からのこのこ出てきたのではない」

と、そういうふうにいエスという方はご自分のことを言っておられます。それが御意だったらいいじゃありませんか。私たちは自分で、絶望の淵に沈んだり、

「俺たちはこの程度の人間か」

「そうだよ、そのとおりだよ」

「じゃ、一緒に死のうか」

「一緒に死のう」

なんて、そんなことではなくて。やつぱり、神さまは何と言っておいらつしやるか。創造してくれた、人間をおつくりくださった神さまは、何と言っておられるのか。このことは人に聞いてもわからない。やつぱり天からの啓示を受けなければ。天からの示しを受けなければ、わからないですよ。ここが憎いところですよ。学問的にいくら究めても、神さまのことはわからない。だから、

「神学という学問は実に哀しい学問だ」

とヒルティは言っている。私が神学者の先生方の前でそう言ったら、苦笑してましたけれども。神学というのは、学問として神の世界のことを究めようとするから、それは尊い営みではありませんけれども、限界がある。神学者が必ずしも本当の意味で信仰者ではない。本当の意味の信仰者というのは、神さまと一つになっている人です。どういうふうにして一つになるか。神さまのほうがりてきてくれて、

「わしはお前を捕まえた。お前を離さない。お前の中に宿るぞ」

と言つて、神さまのほうから降りてきてくれるのだから、実にありがたい話です。無差別に、

「私はお前が大好きだ。お前、好きやねん」

と、関西弁で(笑)、

「好きやねん。お前の中に宿りたいねん」

「そうでっか。そいじゃ、どうぞ」

と。店開きしたら、さつと入ってきてくださったって、もう捕まえたから出ていかない。不法占拠でも何でも無い。追い出せば、出ていってしまわれますよ。非常に慎み深い霊ですから、神さまの霊は。本当に慎み深い霊です。その方が居てくださると、何かうれしくなってくる。永遠なる世界と絆が結ばれる。そういうことをぜひ、体験していただきたいんです。ヒルティさんも、

「これはもう体験以外にない。一人ひとりに実体験していただく以外にはない」

と、はつきりと言つてます。ヒルティさんはもの凄く体験されたみたいですね。その中味まではこゝと細かに書いてくれてないけれども、その文章を読めば、「これは相当なことを体験したな」ということをうかがわせるんです。これを法律では「推認させる」という。

箴言

次は、「箴言」というところ。ここが私は好きなんですよ。23歳でいわゆる回心した時に、一番先に飛び込んできたのは、ここだったんです。「なるほど」と思った。「ソロモンの箴言」と言い伝え

られています。どなたの箴言であつてもいいです。

「わが子よ、わたしの教を忘れず、わたしの戒めを心にとめよ。さつすれば、これ

はあなたの目を長くし、命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。

この箴言で言われているところの言葉は合理的なんです。まず「要件事実」が出てくる。「こうしなさい。さつすれば、こうなる」と。前半が満たせば、自動的に後半が出てくるという、法律の考え方と同じ構造をとっている。そうならなかったら文句を言ったらいいです、「なりませんでした」と。

「さつすれば、まことと捨ててはならない、それをあなたの首に結び、心の碑にしなせ。」

「愛しみと真」、これが旧約聖書と新約聖書を貫いている精神的支柱です。人間にとって大事なものは、本当に大切な、人にとって大事なものは「愛しみと真」である。それをしっかりと刻みこみなさいと。

「さつすれば、あなたは神と人との前に恵みと、誉とを得る。心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよつてはならない。」

自分を賢いと思いなさんな、「あはや」と思いなさいと(笑)。「わしあほでんねん、ばかでんねん」と神さまの前にはそう言いなさいと。これはプライドの高い人には我慢できないでしょうね。

「すべての道で主を認めよ、さつすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言

3:1-6)

次の16章2節から3節、

「²人の道は自分の目にことごとく潔しと見える、しかし主は人の魂をはかられる。³ あなたのなすべき事を主にゆだねよ、そうすれば、あなたの計るところは必ず成る。」(箴言16・2〜3 口語訳)

行き詰まったら、神さまに任してください、皆さん。私はキリストという神さましかないけれども、皆さんはそれぞれ自分の神さまをお持ちのはずなんです。できれば、「キリスト」と言ってください。いっそう話は通じやすいんですけども。そうでなくても、結構ですよ。本当に自分の信ずる神さま、命懸けで従っていける神さま、それを捕まえてください。そうしたら、千人力、万人力という凄いことにきつとなります。皆さんが白髪になられた時に、

「奥田先生が言っていたことは本当だった」

と言ってくださいれば、その時は、私は向こうの世界から、「そうだ、そうだよ」と言いますから。

コヘレトの言葉

次は「コヘレトの言葉」。これは昔の聖書では「伝道の書」と書かれている。

「伝道者は言う、空の空、一切は空である」

と、非常に無常観のただよっている書なんです。今では「コヘレトの言葉」という翻訳になっています。これを見ると、

「実に空しい、空しい。一切は空しい。何をしても結局は死ぬんだから。金持ちであろうと、

そうでなかりうと、みんな死ぬんだ」

と。実に「空しい、空しい」ということから始まっている。ぜひお読みください。聖書の中にそんなものもある。日本の古典の平家物語みたいに。その中に次のような言葉がある。

「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。……

生まれるに時あり、死ぬるに時あり、悲しむに時あり、喜ぶに時あり、すべてのことに時がある。それは神さまの聖手の中にある。定められている」

と。宿命論ですな。そういうことがつらつらと書かれている。少しとびまして、

⁹人が労苦してみたところで何にならう。¹⁰わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。¹¹神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。

これは素晴らしい。人は有限な存在です。しかし、有限なる存在は、無限、永遠というものにやはり恋いこがれる。その思いを人に与えられる。

それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。¹²

わたしは知った、人間にとって最も幸福なのは喜び楽しんで一生を送ることだ、と。

¹³人だれもが飲み食いし、その労苦によって満足するのは神の賜物だ、と。「コヘレト 3・1〜13」

なかなかいいじゃないやありませんか、皆さん。共感するではありませんか。この伝道者、コヘレトが

ずつと地上の姿をもう究めつくして、最後にたどりついたような結論が——中間結論ですかね——一番最後にはやはり、神さまを知ろうという。

「若き日に創造主をおぼえろ」

というところで終わるけれども、その途中でこれらの言葉が出てくる。人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだ。喜び楽しんで一生を送れたら、幸せなんですけれども、なかなかこの現世は、喜び楽しんで一生を送れませぬ。そうでしょ。老々介護というのが待ってます。子供が若くして死ぬこともある、怪我することもある、いつ何が起るかわからない。私がパンフに書きましたように、人生は一寸先は闇です。

病院に入っていたら暴力団員と間違われて、バーンと撃たれて死んだなんていうこと起る世の中なんです。あちらこちらで本当に何が起るかわからない。空から人が降ってきて、犠牲になった人がある。自殺しようと思つた人がビルから飛び下りて、下を通つていた人にぶつかつて、その人も死んだ。天から人が降ってきたという。笑い事ではない。何が起るかわからない。ですから、人が一生楽しんで、生涯を完うすること自体がなかなか奇蹟のようなことなんです。そうなりますと、何が起つても大丈夫、いや、何も起らないように守つてくださる。守り見て、しっかりいたいいていく。そして、

「守りの御手の中で起こっていることは、すべて御意にかなつていらっしゃるんだから大丈夫だ」

と、私はそう申し上げているんです。守りの御手の中で起こっていることは、必ずそこに深い深いと、神さまのご計画があると。たとえば、3歳の子供さんを亡くされても、その子供さんはきつと天使になつて、地上で命を全うする以上の素晴らしい働きを天使となつてなされてはいるはずだ、そういう御意だと。私はそう信じているんです。

ですから、私がいただいている信というものは、決してすべてが思い通りになるといふ信ではありません。神がご計画なさっていることを、人が究めつくすことはできないんですよね。そのことをまず受け入れることなんです。自分の思うような人生ではない。自分の思うような子供たちの幸せであるとは限らない。神は子供たちのこと、親たちのこと、いろんなことを考えてくださっている、その答えなんです。委ねまつる。お任せする。それが成つていくならば、それが最善である。世の人はきつと、

「負け惜しみを言っているな。自分でそうやって、納得させようと思つて、無理しているな」と言うかも知れない。私は決して無理とは思っていない。本当にそのとおりでと思つています。だから、皆さんも、そういう境地に達していただいたら、ずつと生活が楽になります。

「マルタよ、マルタよ、多くのことを思い煩わなくていい、私に任せなさい。私はお前以上に、お子さんのことも、家族のことも、みんなのことを慮つてから」

と。それだけのことができない神さまなら信ずる必要はないです。人間の延長だったら。そうじゃなくて、

「我は天地の主、天地の創造主」

と大見栄をきっている神さまでしょ。私が大見栄を切っているのではない。神さまがそう言っている。「天地を造った創造主なる我は」

と、イザヤ書なんかに出てくる。我々が人間の側から神を知ろうともがいたところで、空しい。神さまのほうから、

「わしはこんなもんだ」

と言って現れてこないよ、だめですよ。だから、現れてくれて、そして目が覚めるということが大事です。だからこそ、「わかりました」ということになるのであって、哲学的に考え抜いて出した結論なんて大したことはない。無神論であろうが、有神論であろうが、大したことはない。人間が作りだしたものですから。そうではなくて、神さまのほうから現れてくるのが大事です。

例えば、あのモーセというイスラエルの指導者は神さまにどこで出会ったか。夢破れて、ミデアンの荒野に逃れて行って、そこで奥さんと幸せな生涯を送っていた。羊飼いをし、羊を連れて歩いていたら時に神さまが現れてきたわけですよ、

「モーセよ、モーセよ」

と。その時、彼は80歳ですよ、それから40年間、指導者としてイスラエルを導いていった。

パウロ(パウロ)だってそうですよ。キリストに敵対していた時に、キリスト教徒を迫害していた時に、白昼、太陽の光よりも凄い光がぱーつと現れて、パウロはぶっ倒された。

「パウロ、パウロ、なんぞ我を迫害するか!」

「あなたさまはどなたですか!」

「汝が迫害するイエスである! 弟子たちに対する迫害は私に対する迫害だ!」

と。パウロはぶっ倒されて、目が見えず、ものが言えず、食事も喉を通らない。三日間、仮死状態です。それで、イエスの弟子のアナニヤの按手あんじゅを通して目が覚めた。

そういうふうにして、向こうから現れてくれる神さまです。それは人を倒す神ではない。生かす神である。生命を与える神さまである。だから、素晴らしいんですよ。私はなにも、皆さん一人ひとりがパウロさんみたいにぶっ倒されてほしいとは思っていませんし、モーセのようにそんな経験しなくてもいいですよ。けれども、そういう人たちがひとつのモデルというか、我々人間のいわば代表者なんです。ああいう方々に現れた神。イザヤにも現れ、エレミヤにも現れ、旧約の預言者にもみな神さまが現れて、動かしているんです。最後はヨハネ、そしてイエスと来たわけですよ。だから、そういう世界を別世界だと思わないで、その同じ世界に飛びこむことですよ、本当に。私はそう思っています。

今、私が残念だと思うのは、子供たちがみな電車の中でもゲームに夢中になっていることです。何か教室が静かになったと思ったら、みなメール交換をやっているみたいで、そういうのは困ります。もつと雄大で気宇壮大な人物に育て上げなければいけないと思う。

そういうことで、神さまの方は、自分のほうから現れてきてくれる。

「わたしは知った。すべて神の業は永遠に不変であり、付け加えることも除くことも

許されない、と。神は人間が神を畏れ敬うように定められた。」(コヘレト3・14)

イザヤ書

次にとびまして、イザヤ書57章にいきます。

「¹⁴主は言われる。盛り上げよ、土を盛り上げて道を備えよ。

これは大事です。我々日本人は道の民です。茶道、華道、柔道、剣道、書道と、それぞれ道です。術ではない。道を備えよと。人の生きる道です。

わたしの民の道からつまずきとなる物を除け。

そして、神がご自分のことを、

¹⁵高く、あがめられて、永遠にいまし、その名を聖と唱えられる方がこう言われる。

わたしは、高く、聖なる所に住み、

いと高き所に住み給う方が一番どん底に降りてくるというのが次に出てくる。

打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち

砕かれた心の人に命を得させる。

人間というのは、ぶっ倒されないと、神さまが来てくれない。環境に打ちのめされて、ずたずたになって、心が傷ついて、体も傷ついて、のたうちまわるような時に、ふと気がついたら、神さまが来てくださっている。絶頂期には神さまは現れてくれません。人間が幸せの絶頂にある時には、

神さまは来てくれない。むしろ、不幸のどん底に落とし入れられた時、落ち込んだ時、その時にすーっと近よってきて、肩をたたいて、

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ、われ汝を休ません」

という声が聞こえてくるんですよ。響いてくる。もし、同じ声が絶頂期にある時に聞こえてきても、耳に聞こえません。耳に入っていない。どういう時に、神さまからの語りかけが、慰めの言葉が、心にしみこんでくるかという時、やはり沈んでいる時ですよ。それがここに肉体的に、精神的に打ち砕かれた姿として書かれている。また、霊的な角度から言いますと、謙^{へん}っている霊、己を何者ともしないような謙遜な霊、そういう霊のところに神は語って来てくださる。

¹⁶わたしは、とこしえに責めるものではない。永遠に怒りを燃やすものでもない。霊

がわたしの前で弱り果てることのないように、わたしの造った命ある者が。」(イザヤ

57・14～16)

旧約聖書の世界にはたえず審判^{さはん}ということがある。祝福の道と審判の道。モーセを通して与えられた律法^{りっぽう}というのは、御意^{みい}にかなう道を行けば祝福があって、それに反対する道に行けば、必ず呪いが待っているという。まあ天国と地獄、それが発信されている。イスラエルのためには、

「天国へ行きますよ」

と言ったけれども、実は人間は出来が悪いから、御意に反することばかりやっていた。それは地獄^{ひつじょう}必定の身^{ひつじょう}ということ。モーセはいつも執り成^としていますよね。しかしながら、その新たな民も不信

の民でした。イザヤとかエレミヤとか、そういう預言者を通して常に神さまが自分の御意を示された。エレミヤ書

次にエレミヤ書のほうへいきます。

「主はこう言われる。知恵ある者は、その知恵を誇るな。力ある者は、その力を誇るな。富ある者は、その富を誇るな。むしろ、誇る者は、この事を誇るがよい。目覚めてわたしを知ること。わたしこそ主。この地に慈しみと正義と恵みの業を行う事。その事をわたしは喜ぶ、と主は言われる。」(エレミヤ9・22～23)

ここに、「智慧」「力」「富」と書いてある。だいたい、学者というのは誇り高いですね。

「私は智者である」と言っていて、威張りたがる。力ある者は権勢を振るう、政治の世界のことでしょうかね。つまり権力、それから富。この三つが本当の意味で神の御意にならなかって用いられたら、この世界はバラ色になるんでしようけれども、それがあらぬ方向ばかりにいくものだから、それで世界はあまりよくないのが現実ですね。神の求めておられるのは、

「心が目覚めてわたしを知ること。わたしこそ主。この地に慈しみと正義と恵みの業を行う事」

慈しみ、正義、恵みの業——言い換えれば慈しみと義と愛——そういったことを人が行うことを私

は喜ぶんだという、預言者エレミヤを通しての言葉です。17章9～10節、

「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。心を探り、そのはらわたを究めるのは、主なるわたしである。それぞれの道、業の結ぶ実に従って報いる。」(エレミヤ17・9～10)

口語訳では、

「心はよるずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。」

となっていて、新共同訳では、

「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか。」

と訳しています。

「心を探り、そのはらわたを究めるのは、主なるわたしである。それぞれの道、業の結ぶ実に従って報いる。」

要するに、これは見えない世界のことです。人は見かけを見て判断します。善良であるかのごとく見せかけもします。しかしながら、心は病んでいる。心は偽っている。

「私は心を見る」

と。とかく旧約聖書は心を、内面の見えぬものを問題にしている。ところが、人々はモーセの律法に従って、見える形で神を敬い、人を愛し、親を敬っているようなふりをした。それをキリストは偽善といって排斥された。そういう経緯があります。

ホセア書

次は、ホセア書、アモス書、ミカ書。この三つには共通点があります。この三つは「小預言書」と言われていますが、ここにはつきりと、

「神が求めていらつしやるものは何か」

ということが出てくる。ホセア書の口語訳と新共同訳の二つを並立しました。口語訳は、

「わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。燔祭よりもむしろ神を知ることを喜ぶ。」(ホセア6・6 口語訳)

この聖句はキリストが福音書の中でしばしば、パリサイ人たちに対して語っておられる言葉です。

「あなたはなぜ、遊女とか取税人とか罪びととかと一緒にいるんですか!？」

と言って、パリサイ人たちが非難した時、

「私が喜ぶのは、犠牲ではなくて、憐れみだ」

ということを引き出した、ということが出てきます。新共同訳ではもつとはつきりと、

「わたしが喜ぶのは、愛であっていけにえではなく、神を知ることであって、焼き尽くす献げ物ではない。」(ホセア6・6 新共同訳)

「焼き尽くす献げ物」は昔の聖書では「燔祭」と書いてある。動物を徹底的に何も残らないまでに焼き尽くして、その香りを神は喜んでいられるという。旧約聖書のレビ記なんかには、祭儀に関わることがこと細かく書かれている。

「何か罪を犯すと、こういう献げ物をしなければいけない。子供が生まれたらこういう献げ物をする」

とか、そういういろいろなことが決められている。キリストはご自分を献げ物にした。ご自身を罪の犠牲にした。昔の燔祭というのは、自分の犯した罪を動物に代わりに贖ってもらうことです。犠牲にして焼き尽くして、それで自分の罪は消していただいた、と信じていたんですね。毎年毎年やるわけです。キリストはただ一回きり、ご自分を燔祭として献げられた。

「怒しみを喜び、犠牲を喜ばない。私が喜ぶのは愛であって犠牲ではない」

と、こう言われたご自分が犠牲となった。そのことに私はキリストの素晴らしさを感じます。私が感動するのはそういうところなんです。

ヨハネ伝に書かれているように姦淫の罪の女が赦された。姦淫の現場で捕まえられてきた罪の女を赦された。

「彼女に石を打つことのできる資格のある者はまず石を取れ」

と言われた。誰も石を打てなかった。一人去り、二人去り、最後にただ一人、女性が残った。

「女よ、他に誰もあなたを罰する者はいないのか?」

「はい、誰もおられません」

「私もあなたを罰しない」

と言われた、キリストは。その言葉を言わせているのは、

「あなたの罪は私が背負う」

という、キリストのはつきりした意志があるからだと思はしう。償いなしに、贖いなしに、赦しというのには楽ですよ、それは。何をして、「よし、よし、よし、よし」と赦してやるというのは。でも、神さまの世界は違います。贖いというものは、罪に対する罰、それが義なる神の要求だったんですね。キリストはそれを全身で受けとめたもうた。人を全部赦す。その代わり、私は犠牲となる。

「これでいいですね」

と。これがキリストが十字架にかかってくださったことなんです。

我々は農耕の民、稲穂の民ですからね、赦しのために犠牲を払う、血を流すというのは嫌です。けれども、イスラエルの宗教はそういう宗教だった。そういう宗教の中にイエスという方が生まれ、そして、自分が犠牲となって、

「もはや永久に犠牲は要らない」

ということを行った。それが福音なんです。これが普遍的なんです。犠牲の宗教だけだったら、とても普遍的になれないと私は思います。そうではなくて、ご自身が犠牲になって終止符を打った。

「私の犠牲で充分だよ。その代わり、あなた方は自分のすべてを、今度は神さまに献げるんですよ」

と。その神さまは愛の神さまです。生命を与えてくださる神さまです。あなたを神さまと同じ霊的

人格に造り上げようとなさっている本当の創造主。かつて人間を土から造られた。今度は霊的人格としてのあなたを造って、本当に神にかたどられた本当の人格に完成する。これが神の御意であり、旧約聖書から新約聖書へ貫いているんです、現在に至るまで。

決して聖書の賞味期限はありませんから。賞味期限も消費期限もありません。神さまは永遠なる神さま。その御言は永遠なんです。我々の歴史というのはたかが3千年や4千年です、文字が出来るから。神さまは永遠なるお方ですから。そのように気宇壮大になつていただきたいんです。

アモス書、ミカ書

次はアモス書です。

「見よ、その日が来ればと、主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渴くことでもなく、主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渴きだ。¹²人々は海から海へと巡り、北から東へとよろめき歩いて、主の言葉を探し求めるが、見いだすことはできない。¹³その日には、美しいおとめも力強い若者も、渴きのために氣を失う。」(アモス8・11～13)

「御言を聞く飢饉」と言われている。

「本ものを探し求めても、もうどこに求めても見つからない。そんな時が来るよ」と。あまりメールばかりをやっていたらだめだよというわけです。

「あまりにもこの世のことばかりにかまけて、それで覆われてしまったら、今度は、本もの生命、御言を探し求めても、もう見つからないよ」

と。そういう警告がアモスを通して発せられています。

それから最後にミカ書。6章。

「何をもって、わたしは主の御前に出で、いと高き神にぬかずくべきか。焼き尽くす献げ物として、当歳の子牛をもって御前に出るべきか。⁷主は喜ばれるだろうか、幾千の雄羊、幾万の油の流れを。わが咎を償うために長子を、自分の罪のために胎の実をささげるべきか。人よ、何が善であり、主が何を御前に求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(ミカ6・6-8)

「正義」とありますが、広い意味で神の義ですね。御意にかなうことが義です。それから、「慈しみ」は愛です。つまり、義と愛を併せて謙り。神の前に謙って歩む。これだけが、神があなたに求められておられることであって、いかなる犠牲でも献げ物でもない。

「献げるものは自分自身を献げなさい。自分の心を献げなさい。そして、神と一緒に歩みなさい」

と。このようにすることが書かれているのがミカ書なんです。

このようにして、旧約聖書を拾ってきますと、旧約聖書にある神の言葉は私たちの思いとなんと近い。旧約聖書のいろんな記事を読むと、私たちが目を背けたくなるようなことがいっぱい書いてある。民族の歴史ですから。でも、そんなものに目を奪われないで、それらの歴史を貫いている人類普遍の真理を探さなくてはならない。我々に呼びかけておられる本当のところは何か。それを探し出さなければなりません。

たとえば砂金採取というのがありますね。砂の中から金を選び出す作業。旧約聖書はイスラエルにとってのひとつの教典であります。その中から、我々にとって本当に普遍的なるものを探し出す。キラキラ輝くものは何か。それを取り出すこと、これが大事なんです。実は、キリストがそれをやってくれました。でも、やってくれました。キリストは、ユダヤ人から見たら許しがたい異端者だった。自分たちが先祖代々、大事にしていたものをぶっ壊すのではないかと。こんな者は生かしておけないということで、十字架につけて殺したわけです、民衆を煽動して。

パウロもその急先鋒でした。それが、さっきも申しましたように、復活されて天におられたキリストが現れてきて、パウロを引っくり返した。最大の使徒になったでしょ、パウロは。こういう歴史的現実には本当に重たいと思いますね。

ですから、旧約聖書をほんの少ししかご紹介できませんでしたが、これからまた、味わっていただきたいと思えます。

カール・ヒルティ

ヒルティ (Carl Hilty, 1833/2/28 ~ 1909/10/12) を紹介しておきたいと思います。1833年2月28日生まれ。私はそれから99年7か月遅れて生まれてきました (1932/9/28生)、ヒルティはスイス生まれ、私は日本生まれということ。亡くなったのが1909年10月12日、76歳で亡くなっています。ヒルティと同年齢だとすると、私は来年亡くならなくてはならないんですが、それだとかやほり困ります。寿命というのは、現代では医学の発達のお陰で長くなった。私は百歳を目指したいと、ヒルティよりも4分の1増しでいこうと思っています。

ヒルティは、お父さんがお医者さん、お母さんが軍医の娘で、ヒルティは末っ子だった。お母さんとは14歳で別れています。25歳でお父さんとも別れている。お母さんがとても素晴らしい人だったようです。ハインリッヒ・パウエルという方の伝記にある紹介によりますと、

「才能豊かで、特に詩的な才能に恵まれた、神的靈性の敬虔な婦人で、彼女の顔は心の根源の窓のようで、その崇高な魂は柔らかい光となって、その心の窓から現れていた。その純な青い目は親しげにまた平安に満ちていた」

こんなふうで紹介されています。ヒルティはこのお母さんからたくさん長所や特性を受けとっているようです。神さまとの霊の交わりを通して、喜びと愛の力強さをヒルティは持っていました。これらはお母さんから受け継がれたものだろうという。

経歴的にいいますと、ゲツチンゲン大学とハイデルベルク大学で法律学を学んで、1855年に

弁護士として活動を始めます。1855年から10年後の1955年に私は京都大学を卒業して法学の研究者になった。彼は弁護士として18年間現場で働きました。18年後、40歳の時、1873年にスイスの最も大きな大学であるベルン大学の正教授に任命されて、国家法、国際法、スイス連邦法、スイスの歴史などを担当しています。

結婚が幸せだったんですね。1857年、ヨハンナ・ゲルトナーと結婚した。最善の秘書であつたようです。私は100年後の1957年に結婚しました。このようにみるとヒルティさんのあとを追いかけているようですね(笑)。

ヒルティの著作としては、『幸福論』3巻 (1891 ~ 1899) が有名です。58歳のとき第1巻が出て、第2巻が62歳のとき出て、第3巻が66歳のとき出て、4年毎に出ています。それから、『眠られぬ夜のために』が1901年、68歳のとき出ています。1908年に『永遠の生命』が出て、これは復活のことを論じている。それから最後の作品として1909年に『力の秘密』が出ています。力の秘訣というか、力の源泉は何処にあるかということを書いていきます。この論文はヒルティの集大成という印象を私は持っています。「註: 『永遠の生命』と『力の秘密』の邦訳は、小池辰雄著作集第5巻『百世のヒルティ』(1977/8/30発行)に掲載」

ヒルティが一番最後に語っていることは、愛なんです。

「愛は一切に勝つ」

「アモール オモニア ヴィンキット」(AMOR OMNIA VINCIT)

という。愛は一切を克服していく、それを力強くうたっている論文が『力の秘密』という遺作です。その中に遺言のような文章があります。その要点をちよつとご紹介したい。

マタイ福音書24章12節に次のような言葉がある。終末の時、即ち世の終わりの時に、

「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える」(マタイ24・12 新共同訳)

「また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう」(マタイ24・12 口語訳)

とある。マタイ伝24章をご覧になると、恐ろしいというか、あまりにも現代によく似ているのでびっくりします。あちらこちらに地震があり、飢饉があり、国と国とが戦いをやり、偽預言者が現れてくる。そのようなことがいろいろ書かれていて、そして、不法がはびこり、愛が冷える。正に現代の世相がそういう世相ですね。ヒルティはそのようなことを、1909年、98年前になりますが、既に指摘している。当時もやはり社会というのがとても不安定な社会で、ちょうどマルクス主義、唯物論思想が出てきた時なんです。世紀末と言われた時代でありますので、非常に不安な時代でした。そこで、ヒルティは、

「今、何が一番欠けているか。善への力がなく。善への力はどこからくるか。それは愛である。愛というのは人間に自然に備わっているものか。残念ながら、そうではない。自然な人間はどうしても、エゴイスト、エゴイズム、そこから抜けきれない。それを克服しなければいけない」

そういうことを言っている。ヒルティの言葉を続けてご紹介しますと、

「私がもう一度、人生をやり直し得るとしたら、何を求めるか。智慧や真理そのものすらも得ようとは望まず、真の親愛(Care)——善意、慈しみ——を得ようと願う。現代社会には愛が欠乏している。人々は愛に飢え渴いている。世界は今や唯一の方法で救われるのみ。即ち、もつと愛が、かくしてもつと生命力が、もつと幸福感が増大して、再びこの世界に入り込むことよってのみ」

であると。愛が、生命力が、幸福感が世界の救済には必要と言う。さらに幸福と幸福感とは違うと言う。ヒルティは、

「幸福なんていうのは定義したって始まらない。客観的に幸福とは何だと定義したって始まらない」

と。現実に人が「幸せだ、幸福だ」と感じることに、これが大事だと言う。皆さん、幸福感はありますか？ 幸福感はどこからくるか、ということになってきますね。

「力がどのようにして愛に至るのか。その愛の内実はいかなるものか。愛は自然の感情ではない。人間に生まれつき備わっているものではない。生来の人間は自己愛、エゴイズムの束縛の中にある。この自己愛、エゴを克服して、真の愛に到達するには超自然的な助けが必要である」

これは神さまからの助け、神の力ということですね。そして、

「愛への第一歩は自己からの離脱である」

と。自分自身を離れること、自分を突き放して見てみる、といますか、自分を「客体化する、客観化する」という言い方をしている。つまり、自分に囚われないで、自分を突き放して、

「お前なんか私の敵だ」

なんて言っていて、自己放棄とか、離脱とか言うんですが、

「自分をいつも神の側に立たせ、神の味方に立たせて、従って自分自身に対して、反対党となる。こういうことが必要だ」

と。自分が自分に対して敵対する。そういうことが必要だと言うんです。こういうヒルティの言葉を現代に照らし合わせてみますと、現代では——私は法律家でありますから、憲法を大事にします——憲法13条に「幸福追求の権利」が保障されています。

「国家権力や何ものにも妨げられないで人間は幸福をとことん追求してよらしい」

という「幸福追求権」というのがお墨付きで与えられている。しかし、現代では残念ながら、「自」を、ヒルティの否定したエゴを拡大するためばかりに使われている。そういうふうに私には思えるんです。

個人が自分で何が最高の価値であるか、何が一番尊いか、それを必死になって求めていく。それは宗教であるかもしれない、学問であるかもしれない、創作活動かもしれない。何でもいけれども、国とかいかなる勢力も、そういう自分自身が最高だと思うものを追求していくことを妨げないこと、いうならばエアポケット、真空地帯を造ってくれているのが憲法だと私は思う。ところが、その真

空地帯を皆なくしてしまっている。人々は寝ているか、それ以外はエゴイズムを最大限發揮して、世界を自己の支配下に置くことに専念している。こういう世の中になってしまっているような気がしてしょうがありません。何だか、求めるものを前提を外して求めている。つまり、利己主義を克服して——直接的な人間賛美、人間肯定ではなくて——いっぺん神さまの前に自分たちの心をからっぽにすることが大事です。自分は放っておけばエゴを追求して何をしでかすかわからない、そういうものが自分の中に潜んでいることに気づきますと、

「あなたが私を導いて、あなたの御意(みこころ)にかなうように最高のものを求めさせてください。」

本当の意味の幸福を求めさせてください」

という、その前提があつて、そのうえで幸福を求めるのならいいんだけど、手放しに幸福を求める自由主義、「自由だ、自由だ」と自由を強調する自由は、放縦への自由、人を食いつくす自由になる。「規制緩和撤廃」とか言つて、そうしたら、強い者ばかりが自分の好き勝手なことをして、弱者をいじめてしまうようなことになっているように、私には映るんです。

ですから、日本という国がもう一度、本当の意味での精神的なもの、即ち、見えるものではなくて見えないものの尊さに気付いて、その中から本当に人間の尊厳というものを回復していくという方向へ向かってほしいなということをおぼろげに思わざるをえないので、ヒルティにかこつけて申しました。

ヒルティの時代に、「世間苦」(Weltschmerz)という世界観、風潮があつたように思います。この言葉は「世間苦」と訳してあるけれども、それをヒルティは、

「即ち、ふりかかってくるかどうか不確かな災いに対する恐怖感」と言っている。必ずくると決まっていなくても、何かそういういつくるかわからない、不確かな災いに対する恐怖感。それから、人間関係では、

「誰を見ても敵だ」

と思うような人間恐怖。

「人を見たら狼と思え」

という諺ことわざがあつたそうです。私たちは日本では

「人を見たら泥棒と思え」

という(笑)。そういう恐怖感が当時あつたそうなんです。だから、

「得体のしれない恐れ、恐怖感、人間に対する不信感、そういったものを除去していくのは、愛でありたもう神さまへの本当の固い信仰、これが必要だ」

と言います。そして、ヒルティは神さまのことを、

「人格の神だ」

という。

「神さまを人格として捉えなければならぬ」

と言う。その「人格神」と言えば、どういう感じをお持ちになるでしょうか。神さまということの中で考えれば、空漠たるもので、捉えどころがなくて、言葉では「神」ですが、捉えどころが

ないでしょ。「氏神様」とか、「伊勢神宮」とかは、捉えどころがあるんですよ。ちゃんと正体がわかってるからね。そうでしょ。自分らのご先祖であつたり、立派な人だつたりするから、いいんですけれども。

「宇宙万物を創造り給うた神なんて言われたって、そんなものはあるもんか」

「いや、あるはずだ」

とか、議論はしても本体は掴めませんよね。だから、私はさっき申しましたように、その本体を神ご自身が我々に、

「私はこれだよ」

と現わしてくれないと、語りかけてくれないと、どうしようもない。それをキャッチしたのがキリストという方かたです。預言者もキャッチしました。しかし、預言者は、「語れ」と言われることを語らされているだけで、預言者自身がどれだけ本当の人格に形づくられたのか知りません。むしろ、神さまの道具として用いられた方々ですね。神の道具です。

「道具」という言葉はいい言葉なんです。道のために具そなえられたものという意味ですから、喜んで私は神さまの道具になりたいと思つていられるけれども。神さまの道具であつたけれども、神ご自身をリアルな(本物の)姿で現わしたのがイエスという霊的人格なんです。それが福音書に伝えられている。後に新約聖書になった。

神さまというのは全く得体の知れないような神さまですけれども、それを

「人格神として捉えろ」

と言う。イエスという方が正に神さまのことを「父よ」と言われたでしょ。

「父よ、あなたの御意を成させてください」

と。神さまを「父」という言葉で呼んだ。これはイエスという方がイスラエルの中で初めてではないかと思う。それから同時に「主よ」と呼んでおられる。父でありながら、主である。「父」という言葉に対して自分は「子」である。「父と子」は愛の関係です。それから、「主と僕」の関係は命令に対して、使命に殉じていく、自分を献げていくという姿です。父なる神であり、そして霊なる神である、父神・霊神。父なる神、霊なる神、そして主なる神。父・霊・主。この渾然一体たる神さま。そういうふうには、イエスという方は神さまを捉えた。そして、自分を神さまに献げていった。だから、イエスは言っておられます。

「私は自分から何も話してない。自分から何もしてない。自分は何もできないんだ。神さまが語れと仰ることを伝えている。神さまが為よと仰ることをしている。為すべきことをお示しくださるからそのとおりにやっている。それでどこがいけないの!？」

と聞き直っておられますよ、キリストは。ヨハネ伝なんか見ますと。正にそれがイエスという方の自覚でした。神さまの前に本当にあのお方はからっぽです。それは神さまという方がどんなに凄いかということをご存知だから。ちっぽけな自分は明け渡して、無限無量なる神さまが中に宿って、「私を見た者は父を見たのである。私を見た人は神を見たのである。私の中にいる神さま

が見えないの?」

という次第ですよ。ですから、正にイエスという方が神さまを

「父なる神、霊なる神、主なる神」

として現してくれた。

ヨハネ伝の中に「サマリアの女」との対話のところがあります。去年もここでお話しましたが、

「神は霊なんだから、拜する者は霊と真をもつて拜すべきである。あの山、この山、このお宮さんではないよ。神は霊なる神であるから、拜する我々の方も霊と真をもつて、全身全霊をあげて、その方を拜する。こういう礼拝を今や求めておられる。今やそういう時期がきている」

ということをイエスは言われた。このことは宗教の否定ですよ。宗教には神がいます。キリスト教、何々教と、みな神があり、教義があり、組織があり、それで代々伝えようとしていく。それを超えて、ちよほど太陽に我々が直接あこがれるように、太陽の光を直接受けるように、キリストという方は神さまと直結して、神さまと一つになってしまった。だから、これがご本尊なのであって、人間が造りあげるような宗教ではない。ヒルティもそれを言っている。

「宗教の枠を超えよう。キリスト教という枠を超えよう。本当の聖徒たち、本当のクリスチャンは枠の中に囚われていない、閉じこもっていない。どこにもいる。どの教会にも、どの国家にも、どの団体にもいる。そういう人たちがそういう教会を支え、団体を支え、

国家を支える。決して自分だけの鎖とくされた集まりを作らない」
と、そんなこともヒルティは言っている。

「そういう人格としての神さまのリアリティ(実在性)というものは、そういう神さまの導きに身を委ねる個々人の生涯において顕著に現れてくる。およそ、神と共に生きるか、神なしに生きるかが本来的にして最大の人生の問題である」

と。こういうふうにあります。そして、
「神さまに対する愛ということがはっきりしてきたならば、そこから万物への愛というものが生まれてくる」

と。神と共にいたもうという実感、これを「神の近親感」と言っています。神が身親しくいてくださる。神の近親感は一切の現実中の最も偉大で、透明で、最も圧倒的な現実である。その際、全く自己の貧弱さを自覚させられる。そして、決して自分の価値のゆえに神が愛してくださるとか、そういったことを決して思わない」

と言います。ヒルティはさかんに、「神への愛」とか、「神に対する愛」とか言うけれども、これには実は前提がある。本当に神さまの愛を受けた人が初めてそこから、

「主よ、あなたを愛しまつります」

と、これが出てくるのであって、それがなくていきなり、

「神さま、あなたを愛しまつります」

なんて言える人は、私はちょっとおかしいと思っただけですよ(笑)。いや、いらつしやれば結構ですよ。それほど人間というのは出来が良くない。やっぱり、人間はまずいただいて、それから「ありがとう」と言う。これが人間ではないですか。まず上(神)からいただいて、無限無量にいただく。

「ここまで無限無量に愛されたんだから、こんなに愛していただいたんだから、こんなに赦していただいたんだから、だから、私も人を無条件に愛し赦さなければならぬ」

と。これが出てくるんですよ。その前提なしに、ただ

「神を愛せよ、神の御意みこころを行え」

というのは、単なる道徳です。偽善者をつくるだけです。そんなのはまっぴら御免ごめんです。だから、ヒルティはあまりにも神に愛されたゆえか、

「神への愛、神への愛」

ということを感じてますけれども、そこには前提があるということを、どうぞ、心にとめていただきたいと思えます。そして、

「愛というものは習慣化しなければいけない」

ということを使う。愛への習慣をどうやって築いていくかについて、次のような面白いことを言っています。まず、

「人から頼まれた時に、嫌な顔をしなされるな。どうせ受け入れるなら、さっさと初めから受け入れなさい」

と言う。世の中には、さんざん渋って、

「まあしようがないな、ま、やってあげようか」

という、勿体ぶって恩着せがましく受け入れる人があるけれども、それはよろしくない。もし、受け入れるなら、始めから「オーケー!」と、これでいいじゃないですかと。私はそのとおりにやっています。人から言われると、何でもすぐ「はい」と、気安く「はい」と言いなさいと。まあ、だまされてはいけませんけれども(笑)。

「本当に人のためになることなら、人が喜んでくれるなら、言われたらすぐ「はい」と言う。

これを習慣化しなさい」

ということをやっています。私は合格。

次に、どのように行動したらよいか。人生には、前置きがいっぱいある。日々のなかで。その時、「何が一番自分は得するかと、それだけを考えてはいいかん。何が利益になるかを考えないで、何が最も愛にふさわしい在り方か。人が最も益を受ける、プラスを受ける、それに自分はどうふるまったらいいかと、愛を基準にして判断する。そうしたら、決してあやまることはない」

と。これも私は合格です(笑)。

いや、私がこんなことをぬけぬけと言うようになったのは、75歳という年齢に達したからだと思います。もう昔だったらとうに死んでいる年齢かもしれないけれども。「古希」というのは70歳です

か。古来希まれなるでしょ〔唐時代の杜甫の詩〕。それを通過して、現在75歳。77歳になったら「喜寿」というんですよ。そんなところへいくんだから、もうこのあたりで少し厚かましくものを言ってもいいだろうなんていう——片一方では、私は若者だと思いつつも——人さまの前では、もう少々のこと言ってもいいだろうなんていう、そういう凶々しさが出てきました。

三つ目は、

「軽々しく、荒々しい言葉や軽蔑の言葉を発しないこと」

これは三角です、ね、

「ばかったれ!」

なんて絶対に言ったらいかん。かっとなると、

「お前、あほとちがうか!」

なんて絶対に言ったらいかんと。私も言わなくなってきましたけれども。嘲りの言葉、軽蔑の言葉を発してはいけないという。それは△さんかにしておきましょう。それから、

「几帳面さが大事だ」

という。几帳面さとは何か。手紙がきますね、相手は返事を待っている。

「すぐ返事を書きなさい」

というんですね。どうでもいい手紙ならいいですけども、相手が返事を待っているような時には、すぐさま返事を出すという、その几帳面さ。これは大事ですよ。これも私は小さい○まるですね。それ

から、

「人目を惹くような贅沢をしない」

その理由は、人がうらやましがったり、妬むから。私はぼろぼろの自転車に乗っています(笑)。大丈夫です。それはゼミ生がプレゼントしてくれた。十何年前になりましたよかね。それが私の愛用の自転車です。決して人目をひくような贅沢はしておりません。これは○。それから次に、

「人があるべき姿において見るのではなく、あるがままの姿で見る」

これが大事ですね。人があるべき姿において見るとは、自分はいかかかってほしいという姿で見ることです。

「あなたはかくあるべきだ、妻であるならばこうすべきであると、そういうふうになってはだめだよ。今のあるがままの姿を受け入れなさい。そのままの姿を受け入れなさい」

と、そういうことを言っている。これも私は○です。どうですか、皆さん、家庭円満の秘訣であります(笑)。それから、

「どんな仕事でも愛をもつてする。嫌々しない」

「どんなアルバイト(Arbeit)」と書いてありますけれども、それは「仕事」と訳したらいいですね。愛をもつてすると。それから、

「人の噂話をする習慣をやめなさい」

だいたい、人の悪口を言って、みな喜んでいるんですね。人の噂話をするのはやめましょうと。こ

れは○。

「人を見たら友と思え」

と。当時は、「人を見たら狼と思え」という諺があったが、そうではなくて、人を見たら友と思えと。その他、ヒルティは、嫌な人間に対してどう対処するかについて書いていますが、長くなるのでここでは省略します。繰り返しになりますが、神と共に生きるほうが、人間と共に生きるよりはるかにたやすい。なぜならば、人間だけへの愛——たとえば恋愛とか、結婚とか、友情とか——これは絶えず気を使つてないといかん。絶えず自分を美しく見せるように、どこかで自分は無理をしている。そして、それがつい破れることがある。だから、そういう関係は疲れる。皆さんはそうではないと思う。やはりヨーロッパ社会だからと思います。ヨーロッパ社会というのは、非常に威厳が大事な社会ですよ。貴族社会の舞踏会の姿を見てください。そういうところで成り立っている人間関係というのは疲れる。非常に不安定である。それよりも、神さまと一緒に生きるほうがうんと楽だと。そして、

「神さまが求めておられるのは、打ち明けた心、飾らない、隠さない、開放的な心、それから神さまへの信、神さまへの愛、これだけを求めておられる」

と。さらに、ヒルティは次のように言っている。

「自分たちが受けてきた教育、今施している教育は失敗だった。余りにも道徳的にかくありなさいということを押しつけすぎている。人が完璧だと思ふような人間、完璧に育てら

れた人間は、余り自分たちは親愛の情を持つことができない。むしろ出来損ないというか、いろいろな欠点だらけの人のほうが却って人に好かれる」

ということを言っています。聖書の中でもそうじゃないかと。ヤコブとか、ダビデとか、その他失敗をたくさん犯している人のほうが神さまに愛されていると。さらに、面白いことを言っています。

「出来の悪い人ほど、神さまに愛され、神さまは育てがいがある」と(笑)。

「あんな人がこんなに素晴らしくなった」

と、神さまはそれを喜ぶ。自分のやりがいがあるというわけです。そういうふうなことも言っています。それから、もうひとつ大事なことを言っています。

「苦難は人を玉とする」

「艱難汝を玉とする」という諺があります。同じことをヒルティは言っている。

「苦難のない人生、艱難のない人生は、在り得ない。もしも、たまたま何の苦難もなく通り過ぎた人生があつたとしたら、それを通ってきた人は凡庸な人間である。全然、魅力がない。人間的に輝かない。むしろ、いろんな艱難によって鍛え上げられてきた人、それも神と共に生きていく、

神が与えてくださる艱難、ヒルティの言葉をもってしますと、

自発的に愛をもって神の聖手から受けとった苦難のみが人を完全へと導く。充分な力と慰

めの裏付けのある苦難、これは人生が私たちの教育のために行ってくれる最善のものであり、また特に最善の力の補充手段である。艱難のわかる人の力が養われる。この苦難なくしては、決して本当の愛には達し得ない」

と。そういうことを言っています。それから

「日々、己が十字架を負って我に従え」

というキリストの言葉を引いて、

「私の弟子となろうと思う者は日々、自分の十字架を負って私について来なさい。あなた方は、我等の主のこの有名な言葉において三つのことに注目せよ。第一に、苦難への意志なしに弟子たらしめることは不可能である」

つまり、キリストの弟子となるということは、苦難を受けることを覚悟してついでに行くということ。

「第二に、我々は自分自身の十字架だけを負うべきであって、おそらく決して臨んでこなようなことのために、言うことを聞いて、必要以上にいろんなものを背負う必要はない。それを気に患ったりする必要はない。自分自身の十字架だけを負えばいい」

それから三つ目に、

「我らは十字架をただ短い一日だけ負えばいい。どの新しい日も新しい力をもたらしてくれる。そして、この力も一日以上のために与えられるものではないということ。我々に必要な日用の糧かたを今日もお与えくださいと祈ること」

「日々の糧を」とありますが、それを手に入れる力というものも、決してたくさんいっぺんにもらうのではなくて、その時その時必要なものは、その時さつと与えられる。そういうふうには、

「日々がすがって生きていくという生き方、これが素晴らしいんだ」

ということをヒルティは言いたいわけですね。それから、老年期ということに触れまして、老年期というのはいろんな才能とか、力が衰えてくるけれども、

「もしも、それまでに愛を本当に体得している方だったら、その人の人生は輝いたものになる」

と。ヒルティの言う「愛」というのは、純粹ないつくしみということなんです。けれども、

「もしもこの愛を、歳とるまでに体得していないと、人生の晩年はかなり厳しいものになるでしょう」

ということを言っています。そして最後に、

「愛は最大の力である。その確信は個々人の生涯において最も遅く、

愛に対する確信というかな、愛を確信できるというのは実は人生の晩年において、

現れてくるものであって、個人の全精神生活の最善の成果である。人々はまず個々人の改善から始めなければならぬ。しかるのちに、全体の改良に歩を進めることができる。個々人が真にキリストに結び付くことが大切である」

一人ひとりがキリストに結びつく。教会というものがありません。欧米には、強固な教会制度があ

ります。教会の中に救いがある。教会に来ておりさえすればよろしい。教会に来て、そこでミサだとか、礼拝をやっていけばよろしい。ヒルティは決して教会を否定しない。教会には祝福があると。言う。けれども、

「そこに満足しないで、やはり直接に、キリストご自身と直接に結びつく。キリストと本当に一つにならないと、力が無い。力強い信仰、どんな人生の風雨にも耐えて、最後に勝利をつかむような、そんな所へはとうてい来れないから」

ということを言います。

「人生の風雨に耐える正しい信仰はあらゆる真の愛の基礎であるが、このような信仰は事実に基づいている。この事実とは、神の力の助けの体験であって、これを体験した者にとつては疑い得ないものである。そうでない信仰はゆらぎやすく、感情でしかない」

人が何か言えば、すぐゆらいでしまう。そういう感情でしかない。

「この世の本当の信仰は本来、神さまの実存、神さまからくる恵み、これを継続的に体験すること、これが本当の信仰だ」

ということを言っております。「実存」(Existenz)、神の実存ということとは、実は神は働きかけたもう神であるということの意味しています。単に存在しているのではない。存在していると同時に働きかける神である。太陽が存在しているのは、絶えず光を送り、熱を送り、万物を生かしていますね。そのように、神さまというのはただ鎮座ましましてはなくて、いと高き所にいる聖なる神

が一番どん底におりてきて、どん底にある人を生かしていく。悲しんでいる人を慰めていく。死の蔭に呻吟している者に生命を与え、光を与える。そういう神さまだと。つまり、働きたもう霊なる神さまです。

私にとっては、そういう神さまを体験するというのは、キリストを体験することなんです。ヒルティは、「神、神、神」と言って、あまり「キリスト」ということを言わないけれども、私においてやはりキリストという方が私のすべてです。

マタイによる福音書

そのキリストが福音書で素晴らしく描かれていますので、今から福音書のほうに入ろうと思います。新約聖書にきますと、これは旧約聖書とは違う光を放っています。

マタイによる福音書の5章43節から48節までを味わいましょう。

「⁴³あなたがたも聞いておくとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。⁴⁴しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。⁴⁵あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。⁴⁶自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、
というの、当時の人々は徴税人というのを軽蔑していた。

同じことをしているではないか。⁴⁷自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、
ユダヤ人は選民意識が強いですから、異邦人を軽蔑していました。

同じことをしているではないか。⁴⁸だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」「(マタイ5・43〜48)

次元が違いますね。旧約聖書はそれなりに、我々に訴えてくれました。そのレベルなら何とかかなりそうでした。ところが、ここへ来ますと、一段とステップアップして、

「これはとてもじゃない。どうにもなりませんよ」

と。それで、ほとんどの方はここで

「さよならー」

と言うんですよ(笑)。それは勿体ないです。キリストが

「(こう)しなさい」

と言われたら、その奥に、

「私がそうさせてあげるからね」

という、この約束がくっついているんですよ。この約束をとらえないで、

「それじゃ、難しいです、さようならー」

と。ほとんどの日本人の知識人は、そうした反応だったんです。明治の頃に内村鑑三のところへた

くさんの人が来られたりした。文化人という方々は皆さん聖書に近づいたんですよ。ところが、皆この「山上の垂訓」で躓いた。

「こんなことはできません!」

ところが、私の恩師である小池辰雄先生は、その鍵をといってくれた。

「キリストは出来ないことをぶつけている。『出来ません、降参します、参りました!』と言ったら、『よし、よし、私がそうしてあげるから、心配するな』と」

これを教えてくれた。これで私は助かりました。

「お前は落第だ。しかし、特別入学、無試験入学という制度がある。そこへ入れてやる。

その代わり、私の弟子になるんだよ。私の言うことが聞けるか」

「聞けますとも。あなたは生命の御言をお持ちです。あなたは生命の君です。あなたは生命をくださいます。私をお責めにならない」

と。絶対にお責めにならない。これだけは保証しておきます。絶対にお責めにならない。人が私を責めるなら、キリストが立ちほだかつて、

「あいつを責めるな。わしを責めよ。私は彼の代理人である。

本人は背後に隠れて、キリストが代理人であつて、

すべて私が受けとめる。だから、彼を赦せ」

と。神さまに対してさえそう仰った。神さまに対しても。神さまがもし、私をお審きになるなら、

イエスさまはつかつかとその前に立ちほだかつて、

「私が背負った十字架で、私がああ十字架で犠牲となつて流した血、これは無効だと仰るんですか。私は自分の意志で十字架についたではありません。あなたが、十字架にかかれと仰ったから、十字架を受けとつたではありませんか。ゲッセマネの祈りの中であれだけ苦しみに耐えて、あげくの果てに十字架を受けとつたではありませんか。これで最終的に、一人びとり、キリストの弟子、キリストを信する者をみんな赦す、罪はもう認めないと仰つたからこそ、私はああ苦しみを負つたではありませんか。地獄の底まで行ってきたではありませんか。それでも足りないかと仰るのですか!」

これがキリストのプロテストなんですよ、私たちを愛して、立ちほだかつて。ヨハネ伝に書かれている「姦淫の罪の女」に対しても、

「私もあなたを罰しない」

と言われた。「私が罰を受けるから」と。そして本当に、それを事実として現した、十字架で。だから、私は十字架にかかってくださったキリストの前には頭を垂れる。本当に頭を垂れます。キリストのほうからは何も仰らない。無理やりに「信じろ」とか、無理やりに「どうしろ」とか、何も仰らない。黙って十字架にかかつて、黙って贖いを済ませて、父の御許に昇つて、光と愛で包んでくれている。そして、我々が気付くのを待つておられる。

私は23歳で気付かされて、それ以来、弟子にしていた。いろんな苦難がありました。疑い

もありました。悩みもありました。それら全部を乗り越え、乗り越えて、幾山かを越えて、今の私があるのであります、なんて(笑)。これからもっと輝きますよ、きつと。本当に将来が輝いているんです。神さまの中でやるべきことがいっぱいあります、私には。そのための智慧も、力も、よわいもすべていただきたいと思っと思っています。皆さんに幸せになってもらいたいと思っっています。

もしも、キリストが私にも「十字架につけ!」と仰ったら、十字架につきますよ。でも、キリストは仰らないと思っっています。

「自分の十字架だけで充分だ。苦難はあるだろう。でも、いけにえ犠牲はないよ。犠牲は私が全部やったから。あなたに生命を与える。力を与える。勇気を与えるから、大丈夫だ。私と一緒に
緒に行こうではないか」

と言われる。こんなありがたい、お友達というかな、生涯の伴侶、そして生涯の師。神さま、私のすべて。こう申し上げたいんです。

そして、私はよく教会で聞かれましたよ。

「あなたは神さまを愛しますか。誰よりも愛しますか。奥さんよりも愛しますか。父親よりも愛しますか?」

「そんな無理なこと言わんでよ、両方愛したらいかんですか?」

「だめです!」

なんて。そんなことはないですよ。本当にキリストに愛され、キリストを愛したら、すべての人を

愛したくなる。すべての人を抱いだきたくなる。そして、必要なら、命を献げたい、差し上げたいと、そういう気持ちにさせられるんですよ。そんなね、

「私だけを愛して、他の人を愛したらだめ!」

なんて、そんなことを言うけちんぼな神さまではないですよ。安心してください。でも、昔は言われました、

「恋人をとるか、神をとるか?」

なんてね。そんな恐ろしい。私はまだキリストを知らない時に、婚約もし、学問の道も選び、やってきたけれども、キリストのところに来たら、みんな無効なのかと思っ、本当に牧師さんに聞きましたよ、

「私の今までやってきたことは全部、これは無効ですか?」

と。なにも返事はくれなかった。けれども、小池先生に聞いたら、

「そんなことはないから、大丈夫だよ」

と。それで安心した。そのぐらい私は臆病者だったんです。それだけ敏感というかな、良心的というか、もうノイローゼになる他ないような人間でした。それが、キリストが図太さをくださった。そこへ導いてくれたのは小池辰雄という恩師でしたので、非常にありがたいと思っっています。

「父の完全であるように、あなたも完全になりなさい」

と。これは最高のキリストの求めです。

「これをしてあげるといふ約束があるから、安心しなさい」

と。生まれたままの自分は敵なんか愛せるものですか。もし、生まれたままの人間で、敵を愛せるという方がいらつしやったら、ここへ来てください。私は跪きますよ、本当に（笑）。礼拝しますよ、そのような神のようなお方に対しては。我々は、一発殴られたら、二発殴り返す。これが私の原理原則なんです。それを神さまは、

「一発殴られたら、一発でがまんしなさい」

という、制限されたのが旧約聖書の律法で、それまでは、二倍返しだ、四倍返しだと言うんでしょ、ローマ法の考え方なんかは。それを何のことはない、イエスは

「左の頬を打たれたら右の頬を出せ」

なんて、そんなとんでもないことを言っておられるから、誰も従えるはずがない。でも、小池先生はこう言われた。

「キリストの頬を打ってごらん。打ったほうの手が痺れるよ」

と。それが本当だと思います。キリストは本当に強い方だから、本気で打ったら、手が痺れて骨が砕けるよと。

我が国の日蓮さんもそういうところがあつたらしいですね。日蓮を刀で斬ろうとしたら、その手が痺れて斬れなかったという。やはり霊的な人物というのはそれくらいなものになかったら、嘘ですよ。全部、上（神）から来ている。上から来ているものを、私のために悪用したらだめ。横領罪

とでも言いましょうか（笑）。背任・横領はだめですよ、これは地獄行きです。けれども、上からくる力は、人を助けるために、人を救うために与えられます。

「求めよ、そうすれば与えられる。私が豊かに与えてあなたと一緒に働こう」

これが御意ですから、人生は、誰でもが輝いた人生観を持つていただきたい。これが私の、皆さまに呼びかけるお願いの言葉です。

隠れたことを見ておられるあなたの父

それから、祈りのことが出てきます。

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。」

当時のパリサイ人たちは、これ見よがしに、街道の辻とか目立つ所で長々と祈りをしていたようです。それに対して、キリストは、

「それは偽善だ。見えない所で、見えない事を見てくださっている父に祈りなさい」ということを言われた。

「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあな

たの父が報いてくださる。」

と。現在では、「隠れたことを」大切にするなんていうことは通らないでしょ。何でも、見えるもので判断するんですよ。

大学もそうです。「第三者評価」とか言いまして、もう「監督、監督、監督」で、そうしないと相手は何をするかわからないという、不信の目で見られている。残念ながら。大学の先生方は誰一人それに対して文句を言わない。情けない、悲しい、と私は心の中で思っていますが、言葉では言いません。そんなことを言ったら、袋叩きになりますから。でも、だいたい、制度を作って、みんなが心からそれを守って、そのとおりやっていけばいいんだけど、やってない時が多いと思うと、監視が入る。監視の目が恐いから、これをやる。これはちやうど旧約聖書の律法に逆戻りするのと同じですよ。心からやってないんですね。外から睨にらまれるから、これをする。第三者の目が恐いから、これをする。これは偽善ではありませんか。教育界が正にそんなことをする状況では困ります。それは中にはサボるような教師もいるから、そのことを我々教師仲間がつかばってしまおうから、第三者の評価が入るのかもしれない。しかし、本来、我々は内面的にあるべき姿を追い求めて、死力を尽くして戦うのであり、外部からは、「そこまでやりなさんな、やり過ぎだよ」と言ってくれるのが本当だと思っけれども。まあ余計なことを言っただかも知れませんが、この、

「隠れたる事を見ておられる、隠れたる父に」

という感覚、これを日本人は取り戻してほしいと思います。それから、

「祈る時に、くどくどと言葉を重ねる必要はない」と言う。

「また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思ひ込んでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」

キリストはこう言う、

「私はお前の必要をすべて知っているよ」

と。イエスという方は神さまを「父よ」と呼んでおられる。だから、今でも

「天におられる我等の父なる神さま」

と、クリスチャンは祈っている。でも、キリストは、

「私がお前の主だよ。私とお前は一つだよ」

と、こう言って来てくださったんですね。見えない神さまは、キリストの中に入り込んでしまつて、キリストと一つで、霊的人格となつて、私に迫って来てくださったっている。だから、こういう言葉に触れた時に、

「私はお前が願う前から、お前の必要なものを知っているよ」

と、こういうように読み替えるんです。みんな読み替えてくださいね。誰も怒りませんから。キリ

ストは、

「そうだ、そうだ、そのとおりだよ」

と言っておられる。だから、「主の祈り」はこれでよろしいですけれども、

『だから、こう祈りなさい。』天におられるわたしたちの父よ、御名みなが崇あがめられますように。

「キリストさま、そしてキリストの父なる神さま」と、こういうふうによったつてかまいません。御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。

天において御心はなっている。ところが、地はガタガタだと。

「天においてなっているとおり、愛と義が天においては完まっうされている。それが地にも行われますように、この私を用いて成就してください」

という祈りだと、これも小池辰雄先生が教えてくれた解釈でした。それから、

「わたしたちに必要な糧を今日与えてください。」「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。」「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになる。」「しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」「(マタイ6・5・15)

「主の祈り」の中でこれだけ「赦せ、赦せ、赦せ」ということをつけ加えておられるということは、

いかに我々が人を赦し難い性質の人間かということ。」「簡単に赦した」なんて信じたらだめですよ。その怨みが残っていますよ、きつと相手の人に。相手が、「いいよ、いいよ、赦したよ」と言っても、なお5回ぐらい謝あまりなさいね。そして、「もう、そんなに謝らんでいいから」と。まあそんなものでないでしょうか。人間の言葉に表れたものなんて、全然、本当ではないですね。「あんなんか、きらい！」と言っている人が実はそうではなかったりね。ところが、私たちは、法学を学んだら、すべて表示主義ひょうじしぎと言いまして、

「言葉に表れたものだけを信じていきなさい」

と言って教えられた。ところが、ドラマなんかを見てみると、みな反対ですよ。「あんなんか、きらい。お父さんなんか、きらい！」と言っているのが、本当はお父さんを好きなんですよ。お父さんは、「お前なんか、俺の子ではない！」と言っているながら、本当は可愛めづくしょうがないんですよ。だから、言葉の奥、裏にある本当のものをつかまないと、人間関係は成り立たない。だから、法学は出直さなければいけない(笑)。言葉も大事ですが、でも、言葉の奥にあるもつと大事なものを汲み取るような、それでないと本当の裁判官にはなれない。

何も心配せんでいい

次は私にとって大事な言葉を取り上げます。私は本当に思い煩いの多い存在だったんですね。自分が何もかも背負いこんで、家族のことも、自分のことも全部、私が全責任を負わねばならない。

思い煩いが多いと、身体まで病んできますね。心も病んできます。もう幾度も保健診療所という所に通ったか。そういう私だった。それがキリストの所へ来て、この言葉をいただいたんですね。

「何も心配せんでいいよ。自分の身体のこと、食べ物のこと、衣服のこと、何も心配いらんよ」

「はい、そうですか!」と。

³²「あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。³³」

と、32節にあります。

「私はお前に必要なものを全部知っているよ」

と、そう言ってくださっている。キリストから言えば、

「私という本体を求めてきなさい。私を求めてきて、私と一つになって歩めば、すべて必要なものは添えて与えられるから」

と。「神の国と神の義を」というのは、「私(キリスト)自身を」ということです。

³³「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。³⁴」だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」(マタイ6:32~34)

一日の苦労は一日で十分であると。どれだけ慰められたかわかりません。一日の苦労は一日で十分。

「今日一日の糧をお与えください」

と。朝、起きたら、「今日一日をよろしくお願いいたします」と、私の祈りというのはそんな祈りなんです。あまり長時間祈ることはできないんです、私という人間は。風呂の中で、「主さま、イエスさま」と祈っているんですね。朝、起きたら、

「今日も一日、どうぞよろしくお願いいたします」

と。何か妻が夫に言う台詞せりふみたいですね(笑)。

「ふつつかな者ですが、よろしくお願いいたします」

なんて。そういうふうにして、短く祈って、それでもういいんですよ、私の場合は。

マルコによる福音書

次はマルコによる福音書の12章。律法学者との議論があります。

「²⁸彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。」あらゆるおきて掟のうちでどれが第一でしようか。

「何が一番大事な律法ですか?」と。

²⁹イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。³⁰心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』」

全心全霊、全力でということですよ。それから、

³¹第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまざる掟はほかにない。』（マルコ12・28～31）

この二つだよと。モーセに与えられた十誡、それをさらに具体化した細かい規則というものすべてはこの二つの掟におさまる、しかもこれは一つだよ。「あなたが（隣人を）愛する」と言ったって、「神に愛された人間がその愛をもって人に仕えていく、人を愛していく」と。それだけなんです。それ以上のことは何もありませんから。そういうことがこの福音書からの言葉に示されています。

次は、ルカの福音書。これは先ほど、ヒルティの言葉の中で引用いたしましたので、省略いたします。

²³それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。²⁴自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。』（ルカ9・23～24）

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」という諺ことわざもありますね。自分に拘こだわってはだめ。自分を捨てて飛び込んでみたら、案外、運命が開けていく。

それからヨハネ伝、これも先ほど申しました。生命のパンについてです。要するに、モーセは昔、荒野の旅をしている時に、民に「マンナ」というものを与えました。これは天から降ってきた。ところが、人々はそれを食べても、やはり死んでしまいました。イエスは、

「私は天からくだってきた本当のパンである。私を食べる者は死なない。私の血を飲む者は渴かない。私を食べる、私の血を飲む」と言われた。つまり、

「私と一つになれ、一如になれ」

ということですよ。もう分離できないまでに、一如一体になれという。合一の境地、それを実現しないではいけません。

「いや、そんなことは、私はできません」

「それはそうだよ。人間の側ではできない。でも、私がそれを望んでいる。私がそれを成就するよ」

「はい、わかりました。私が出る幕ではありませんでした」

と。いつも、「私が出る幕ではありませんでした」と、その言葉を用意しておかないといけない。キリストの言葉がいろいろ出てきて、それに直接立ち向かおうと思ったら、それはまるで160キロの速球を我々が打つことができないのと同じです。プロの野球選手なら打ちますけれども。キリストが仰っている言葉は、キリストと同レベルの人でないといけないことばかり仰っています。けれどもそれ以下には放っておかない。

永遠の生命は神さまのものでしょ。無限無量の愛、この世の人のために生命を捨てられる、これは神さまの愛でしょ。そんなものは我々に到底達せられない。それを

「あなたはそうなるよ。それは私の仕事だよ。お前と私と一つになっていけば、きつとこ
ういう人にならなうよ。将来が楽しみだよ」

と、そう約束してくださっている。だから、素晴らしいんですよ。「すべし、すべからず」の固苦しいところでは、人間は窒息するではありませんか。このせちがらい世の中で、住みにくい世の中で、教会へ行つてますます住みにくくなつたら、それこそやり切れませんね。

だから、教会はもつともっと大胆にキリストの言葉を生命の言葉として掲げないといけない。私は教会の先生方にそう訴えたいんです。私は学問の道と教育の道、それに福音の道と――二足の草鞋か三足の草鞋か知りませんが――それを一生懸命やってきた。それはやはり教会の中でもの足りないものがあると思うからなんです。

教会は大事です。大事な教会の中で本当の生命をもつともっと大胆に伝えてほしい。もつともつと教会というのは、全人類を包み込むような、宗教の枠を突き抜けた、太陽の光に包まれて太陽と一つになるような、そういう教会であつてほしい。牧師先生の皆さんも、信者の皆さんも。そうしたらもう、それこそ地球は変わっていく。

ヒルティが言っている。

「本当のキリストチャンが今の教会を満たしていたならば、もうとつと世界は変わつてしまつていく。ところが、今の教会はそうではない。祝福は残っているけれども、本当の教会の姿が変わつてほしい」

ということを訴えているんです。百年後も全く同じではありませんか。日本の教会の数は少ない。クリスチャンというのは人口の1%に過ぎないと言われていて、カトリックとプロテスタントを合わせて。しかも、社会を動かす力になっていない。道徳教育とか、教育再生とか言いましても、「キリストの心を心としよう」

ということを誰も言ってくれない。教育再生会議の先生方は、本当に大事なことが塞が^{ふさ}がれている。

「目に見えるところで何とかしよう」

という。そうじゃないんです。皆さん一人ひとりがご自分の存在の中で、

「命よりも大事なものはこれだよ。キリストの中にいる人に生命が来ているんです。そういう人は絶対に死にません、倒れない。輝くんです。この地に居るだけではないんですよ」

と。そういうことをご自身の生き方の中で表していただきたい。

このことがこういう講演会をしている私の本当の気持ちなんです。このキリストの言葉を十分に味わつていただきたいと思ひます。

ヨハネによる福音書

次はヨハネ福音書15章。キリストは、

「¹⁵わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

と言われた。葡萄の木と枝。私たちはキリストという方にくつついている。キリストと一つになつ

ている。そうすると、豊かに実を結ぶ。豊かに実を結ばざるをえない。

我々クリスチャンというのは、どこに弱点を持っているかというところ、キリストから離れたら何もできない、世渡りがへたくそということ。本当なんですよ。一旦、キリスト族になったら、これはもう抜けたらあかんのです。抜けたらもう使いものになりませんから。この世の人らは賢いですがね、いくらでも世渡りができるんですよ。けれども、キリストの味を味わってしまったら、もう世渡りはできませんよ、へたくそで。そして充実していきまから、絶対に離れたらだめ。もう諦めていただくこと。キリストは離しませんから。キリストが伴ってくださったら、もう何も恐いものはない。そういうことをこのヨハネ伝の15章から受けとっていただきたいんですね。

ローマ信徒への手紙

その次はローマ信徒への手紙。ここでは、生まれながらの人間というのを「肉」と呼んでいる。ヒルティが言っているあの人間性、生まれながらの人間のことです。そこに巣くっている悪ということ。人間がもっているものは、何も悪いものばかりではない。善いものもいっぱいあるんですけども、その根底にはエゴイズムというか、自分がかわいい、自己愛というものが必ずある。どうしてもそこから抜けきれない。他人と自分とどちらを大事にするかというなら、まず自分ということになります。それをパウロは「肉」と呼んでいます。けれども、神さまは「霊」である。神中心でいく生き方、神さまの霊に導かれていく生き方というのは、そういった肉なるものを克服してい

く生き方です。本当の自由の境地に入ることができるということを、このローマ信徒への手紙の8章1節から11節で言っていますので、これをお読みいただきたいと思えます。

コリント信徒への手紙

次に、コリント信徒への第一の手紙。これは結婚式で必ず読まれるところですね。

「愛は寛容であり、愛は情け深い……」
という、あの有名なところですね。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。」(コリント13・4〜8)

それから少し飛びまして、将来のことが出てくるんです。やがて向こうの世界へ行つてキリストにお会いする時に、どういうことになるかということ、

「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見るようになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているように、はっきり知ることになる。」¹²それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」¹³

〔コリント13・12〕(13)

今までおぼろげにしか見ていなかった、それが本当にリアルに見えるようになる。顔と顔を合わせて見るようになる。だからこそ、信仰、希望、愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛であると。ヒルティと同じですね、愛であるという。

それから、次のコリント信徒への第二の手紙。

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。¹⁷わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。¹⁸わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」〔コリント2・4・16〕¹⁸

これは、「外なる人」と「内なる人」。生まれながらの人間は破れている。しかし、内側に築かれた第二の人、霊なる人、これは日々新たに輝いていくということを言っています。

ガラテヤ信徒への手紙

最後に、ガラテヤ信徒への手紙。これは自由のことを言っています。

「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださいました

です。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛くわに二度とつながれてはなりません。」(ガラテヤ5・1)

キリストは私たちに自由を与えてくださった。我々を縛るためにキリストは来られたのではない。私たちが本心に解放して、空の鳥が自由に羽ばたくように私たちに自由を得させてくださった。しかし、その自由というのは、放縦への自由、人を傷つける自由ではない。そういう放縦への自由とか、人を傷つける自由のことを「肉」と呼んでいる。そうではなくて、霊に導かれて霊に従って生きる自由、愛への自由、これが本当の自由である。人間の本质、人間の存在の根底には、このような神の質をいただく姿に人間が変わっていく可能性が秘められている。そのような可能性をいただいているところに、人間の尊厳があると、私は信じています。ヒルティは、

「子供たちというのは本当に神さまからの贈り物である。どんな子供も必ずある時期に、神さまの霊に会えるように、そのように育てていかなければいけない」

と言っている。だから、我々の世代は、次の世代をどう育てていくのか、次の世代に何を望むか、それを真剣に考えなければならぬ。皆さんお一人お一人が、いわば模範を示していただいて、

「ああ、ああいうおじいちゃんになりたい。ああいうおばあちゃんになりたい。こういうお父さんになりたい、お母さんになりたい」

という、そういう大人がモデルを示さなかったら、子供はついて来ませんよ。残念ながら、ここにいらっしやる方はかなりご年配の方が多いようでありませぬけれども、まだまだ

「本当に大事なものは何か」

「だ私は望みを捨てません。どうぞ、皆さんお一人お一人が」ということを真剣に考えていたのだと思います。

今日は短い時間の中で駆け足でいろんなことを話してきましたけれども、本来、神の与えたもう喜びというものは湧いてくるものです。そして、日々、生きる喜びを与えてくださるものです。私たちが悲しんでいたり、憂鬱な顔をしていたら、子供たちは喜んでくれますよ。私たちが生き生きと生きて、子供たちに「ああ、かわいいね」と言ったら、自然に子供に近づいて行くようなそういうおじいちゃん、おばあちゃん——なんだか、すっかりおじいちゃん、おばあちゃんになってしまいましたけれども——そういうお姉さん、お兄さん、そういう方々であれば、日本の未来は明るく思えます。どうぞ、小さなところから始めてくださいませ。それではこれで終わりいたします。

祈り

それでは、短くお祈りをさせていただきます。

主イエス・キリストさま、天の父なるおん神さま、ありがとうございます。この所にこんなにもたくさんの方々をあなたが呼び集めてくださり、こうして語る者も聴く者も本当に一つとなつて、あなたの送ってくださる霊気の中で、心地よい風の中で、また温泉のような湯の中で、あなたと一緒に時を過ごすことができまして、心から感謝をいたします。

どうぞ、今日、手にされたプリント、そして語られました言葉、そうしたものを宝物としてこれから大事にしていいただき、それを出発点として、いよいよお一人お一人が輝いて、新しい人生へと歩み出していただけますように、希い奉ります。

現実には厳しく、ご老人をかかえ、またいろんなご病気をかかえ、また病める者をいたわり、子供たちを抱きと、たくさんのお重荷がこの地上ではございますが、あなたがついてくだされば大丈夫です。どうぞ、あなたさまが一人ひとりを慈しみ、力を与え、勇気を与え、光を与え、愛を与えて、お一人お一人を祝福してくださるように希い奉ります。

この講演会を感謝し、この祈りを、皆さまの胸のうちなる祈りとともに、主イエス・キリストの御名を通して御前にお献げいたします。アーメン。